



革靴の横に



川路 新吉

革靴の横に

私は悪魔に魂を売りました。

何の比喩でもありません。悪魔は存在したのです。

悪魔が私の前にあらわれたのはだいぶ前のことです。

私はそのころ漫然と日々を過ごし、ただただ幸せそうに流れている世の中を呪って毎日を過ごす、ふざけた人間でした。

「金さえあれば」

何の努力もせず、ただただそう思っていました。

今の私を知っている人ならびっくりするかもしれません。今の会社を設立する前の話です。

悪魔はそんな何も持たない自分のところへやってきました。

ある雨の日、だれかがアパートのドアをたたく音がしました。ドアを開けると男がいました。

手足、指の数、目鼻口の位置、シルエットどこも人間と変わらないはずなのに、何か寒々しい印象を与える男でした。

「私と契約いたしませんか」

話を聞くと、契約するとすべてが私の望むようになると言うのです。

とうてい信じられません。そんなうまい話はないと思いました。

「では試してみますか？」

と悪魔はいいました。一日だけ試用期間を差し上げましょうといいました。悪魔はその日はそのまま帰りました。

次の日の出来事は語ることもないでしょう。

悪魔に再び会ったときには私は大金を手にしていました。

「すぐに契約させてくれ」

私は悪魔に頼みました。

悪魔はどこからか一枚の紙を取り出しました。

契約書でした。

契約書には対価としてあるものをいただきますと書いてありました。

今、思えばそこでしっかりと考えていれば、このようなことにはならなかつたでしょう。

しかし、試用期間で得られた大金に目がくらんでしまい、契約書にサインをしてしまいました

。

悪魔と契約を交わしてから、私の人生は変わりました。

私自身は何も変わらないのに、やることなすことすべてがうまく回り始めました。

会社では評価されるようになり、すぐに昇進しました。給料もそれまでとは比べものにならないほどもらえるようになりました。それよりも高い金額を提示して私を引き抜こうとする会社も現れました。

しかし、私の心は満たされませんでした。 考えてみれば当たり前です。だけど、そのころの私は甘く考えていました。きっともっと金を稼げば幸せになれる。そう思っていました。

そこで、会社を興すことにしました。みなさんご存じだと思います。私がいまやっている会社です。

ご存じの通り会社は順調にいきました。すべてがうまくいっているといつても私自身のうぬぼれではないでしょう。私は莫大な、ふつうの人間ならば使い切ることのできないほどの金を得ることができました。

だけど、何も得られませんでした。

会社で得た使いきれない大金を使って、慈善事業をやってみたりもしました。そのような事業にはそれまで全く興味もありませんでしたが、人の為になることをすれば何か変わるかもしれないという一抹の希望を持ってやったことです。

「あなたはすばらしい」

「あなたのおかげで助かった人が大勢いる。ありがとう」

みんな私をほめてくれます。しかし、いくら賞賛されようとも私の心が満たされることはありませんでした。

もう、みなさんお気づきかと思います。

悪魔が契約の際に私に要求したもの。それは「満足」でした。

わたしが得た「満足」はすべて悪魔に支払われていました。

「満足」がない人生がこのように味気なく、このように苦痛を伴うものだとは。

金を得ても何も感じず、きれいな女性と一緒にいても何も感じず、好物を食べてもおいしいと感じるけれどもただそれだけ。むなしい気持ちだけが残る。

我慢できない。私は悪魔を呼び出し、契約を解除してほしいと訴えました。

しかし、悪魔のこたえはすぐないものでした。そんなことはできない。ただそれだけでした。

もうこれ以上、こんな人生を送っていくことはわたしには耐えきれなくなりました。

先立つ不幸をお許しください。

革靴の横に

<http://p.booklog.jp/book/40128>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40128>

ブクログのパブ一本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40128>

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.